

カブトエビ

板井 隆彦



アメリカカブトエビ 安藤晴康氏撮影

静岡県内において田んぼの減少は市街地周辺のみならず山地近くでも目立つようになってきた。もちろん開発事業によるものがおおきく、静岡市郊外の麻機地区の遊水地事業のような大規模なものから大小の宅地開発や工場用地開発などもある。このほか畑地化などによるものも少なくなく、稲作農家の高齢化もあって静岡県内の田んぼの土地利用に関してはこれからも変化がつづくのではなからうか。

田んぼのような、四季を通してみると水があつたりなかつたりするような水域を一時的水域というが、カブトエビはこの一時的水域に限って特別に見られる生物なのである。カブトエビと比較的近いホウネンエビも一時的水域の生息者ではあるが、カブトエビはホウネンエビよりも生息域がはるかに限られているようである。

カブトエビは、節足動物の甲殻類に属し、鰓脚綱（ホウネンエビもこれに属する）カブトエビ科カブトエビ属の動物で、世界中に4種がみられる。その4種とは、標準和名にアジア、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアの冠がつくカブトエビで、日本国内ではオーストラリアカブトエビ以外の3種が見つかっている。

カブトエビは、先端から腹部末端までの体長が20～30mmとごく小さいながら、体は他の甲殻類と同様に頭部、胸部、腹部に分かれており、また体長よりやや短い尾を1対もっている。脚は胸部に11対あるほか、前方の腹節にもついている。このカブトエビは先述したように水田や水田まわりの浅い水溜まりなどの一時的水域に見られる。休耕田内の水溜まりで見かけたものを観察すると、水底をはい回りながら藻類やその他の有機物を雑食して生活しているようである。このような行動をすることから水田では雑草除去の効果もあるとされ、農家からは好まれる向きもある。

このカブトエビは、じつは日本では古い記録にはなく、生息が知られるようになったのは大正時代以降である。したがって在来種ではなく、人間の往来などによって移入してきた外来生物とされている。日本で最初にカブトエビが記録されたのは四国の香川県で、静岡県での初記録は沼津市である。静岡県内では近年遠州地方からも子どもが見つけているが、全国的に、また静岡県においてもくわしい分布記録がないのが実情である。上記の産地のカブトエビはいずれもアメリカカブトエビであるが、ごく最近沼津地方から見つかったものにはアメリカカブトエビとアジアカブトエビが混在していたようである。これらの地以外でも見つかる可能性が十分にある。ふだんはあまり覗かない身近な休耕田の水溜まりなどあらためて調べてみる必要があるように思われる。